

# 新研究科長の抱負

## 伝統の継承と発展を目指して

法学研究科長 勝田卓也



法学部・法学研究科には、60年以上の歴史があり、多くの卒業生がそれぞれの分野で活躍しています。現在の法学研究科・法学部では、教育について、大きく分けて3つの使命を遂行しています。学部教育では、多様な進路を目指す様々なタイプの学生のニーズに応えるために、2010年度以来「司法コース」、「行政コース」、「企業・国際コース」という3つの履修コースを設けて、少人数の専門演習を必修科目とすることに、リーガル・マイナ

ドの訓練を行ってきました。

大学院法学研究科には2つの専攻があります。法学政治学専攻では、高度職業人の養成と研究者の養成を総合的

に追求しています。法曹養成専攻（法科大学院）においては、大都市大阪市の市域に設置される唯一の法科大学院として、大都市であるがゆえに発生する様々な法的問題に即応できる高度な法的能力を備えた、真のプロフェッショナルとしての法曹の養成を実践しています。

教育面での使命はこのように多岐にわたるのですが、研究面でも、教員はそれぞれの分野で実績を上げています。とりわけ、1991年以来ドイツのフライブルク大学と協働して開催されてきた「日独法学シンポジウム」は、単に国際交流の場として貴重であるばかりでなく、日独双方でその成果を刊行物として公表してきました。本学法学研究科の研究水準の高さを示す重要な取り組みです。

こうした、すばらしい伝統を有する法学部・法学研究科ではありますが、時代の変化は様々な形でわれわれに對

応を迫って来ます。しかし、法学や政治学がわれわれに教えるのは、いかなる「改革」であれ、熟慮と真摯な対話に基づいて決定すべきこと、そして、多数者が同意しても行うべきではない行為があるということです。法学部・法学研究科の伝統を守り、同時に時代の変化に真摯に向き合う努力をしていきたいと考えています。

## 「商学部の来し方、行末をかんがみて」

経営学研究科長 向山敦夫



このたび経営学研究科長（商学部長）を拝命して、個人的な経験の範囲内で本学部の過去と将来について考えてみたい。

商学部では「考える実学」を理念として掲げている。ビジネスの現場で何が起きているのかを常に見据え、実務に役立つ知識を身につけさせること

〔履歴〕  
1970年生。早稲田大学大学院法学研究科・法学部助手を経て20002年に本学法学研究科助教授、2012年同教授。1999年から2001年までヴァージニア大学ロー・スクール客員研究員。日米法学会評議員、『アメリカ法』編集委員。専門は英米法、特にアメリカ憲法史と司法制度。著書として『アメリカ南部の法と連邦最高裁』（有斐閣、2011年）がある。

を心がけているが、単なる技術の習得ではなく、技術を用いるための基礎である理論や歴史を合わせて習得し、「理論と実務のインタラクション（相互作用）」を通じて自分の頭で物事を考え、それを明確に表現できる能力を養うことを目指している。

1978（昭和53）年の入学時には「経営学」・「経済学」・「商業簿記」・「数学」が必修科目であったが、現在も「経営学」・「経済学」・「会計基礎論」の3つの必修科目は維持されている。1年次のゼミである「プロゼミナール」もそのままである。ただし、専

門ゼミナールと卒業論文は選択制になった。

当時、「商学部は個人商店だ」と聞いた記憶がある。強烈な個性を有する先生がそれぞれに店を構え、その先生を慕う大人の学生が学ぶという構図であらう。現在は、商学部で学ぶ女子学生の割合が増えた（おおよそ40%）。大学までに受けた教育の経験からか学生は教えられることに慣れ、積極性に欠けているとまことしやかにささやかれている。学生気質が変わったかわからないかは以前よく議論をした。全体としてみても変わった部分と変わらない部分があるし、個々の学生の中にも変わった部分と変わらない部分がある（と信じたい）。

商学部は新たな局面を迎えている。現在、27人（定員）の教員が220名の定員の学生を教えている。もはや個人商店では商学部は経営できないであらう。大きな変化として、2018（平成30）年から公共経営と地域経営の視点から行政組織、NPO、NGOといった非営利組織や地域産業、地域企業の経営について学ぶ公共経営学科を新たに設置し、本学部は商学科と公共経営学科の2学科体制になる。

「私の時代はこうだった」と過去を振り返るだけでは何も生まれない。商

学部らしさを今の学生にも伝えていきたい。ひとつ気になっているのは、OB・OGという商学部の貴重な財産を生かし切れていない点である。OB・OG諸氏に対し、今後とも物心両面でのご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

#### 〔履歴〕

1959年生。大阪市立大学商学部卒・同大学院経営学研究科修士・同大学博士（経営学）。1987年愛媛大学法文学部専任講師、1989年同助教授、1991年岡山大学経済学部助教授、1997年本学商学部助教授に着任、2004年本学大学院経営学研究科・商学部教授。2013年本学大学院経営学研究科副研究科長・商学部副学部長。専門は会計学（社会関連会計論・経営分析論）。主な著書に『社会環境会計論』白桃書房など。

×

×

×

## 「文学部の逆襲」のために

文学研究科長 仁木 宏



文学研究科は、二〇一六年一月一

二日（土）、グランフロント大阪で、「秋のオープンキャンパス OPEIN F ACULTY二〇一六」を開催しました。この催しは、「文学部の逆襲 漂流する現代を生きのびるためのガクモン」をタイトルとしました。

最近、大学に求められる役割が、世の中の「役に立つ」ことに偏っているのではないかと。文学部が担う人文学は、一見「役に立たない」研究をつうじて、世界のなり立ちやしくみを明らかにしたり、その見方を変えたりするものである。そうした文学部・文学研究科の役割をあらためて世に問いたい、というのが趣旨です。

学外の論客をお呼びして「文学部は役に立たないのか」「生涯学習時代における文学部の役割はなにか」を議論

する二つのシンポジウムを開催するとともに、若手教員や大学院生による研究発表をおこないました。研究発表は、お行儀よく講義形式でするものとは別に、大きな部屋のなかのあちこちで円座になって、あるいはゲリラ的におこなうものを試みました。

当日は、一般の方ももちろん、高校生、他大学の学生・院生や教員などが多数来場され、文学部や他学部の同窓生のみならず、複数の新聞の記事にもとりあげられ、社会的にも一定の注目を集めることに成功したといえるでしょう。普段は研究室でパソコンに向かい、論文として発表する研究成果を、いかにして一般の方々に伝えるのか、工夫と苦労を重ねた若手研究者諸君にとっても大きな刺激になったようです。

学部・研究科単独のこうした催しは市大では初めてであり、全国的にみても、特に文学部が開催することはまれであったようです。もちろん、一日のイベントだけで目的が達成されるはずはありません。文学部での研究や教育、

社会貢献を進め、その存在価値を愚直に発信しつづけることが重要でしよう。

人文学を貶めるような近年の論調をただ単に嘆くのではなく、文学部が有

## 自由に、柔軟に、複眼的に考えること

経済学研究科長 中村 健 吾



新制大阪市立大学における経済学部  
の開設（1949年）から数えま  
すと、本年は68年目にあたります。それ  
以来、経済学部は、近畿圏を中心とし  
ながら世界の動向を見すえて活躍する  
多くの社会人を育てあげ、大学院経済  
学研究科は、全国の大学に第一線の研  
究者たちを輩出してきました。そして、  
当学部・研究科が擁している教員スタ  
ッフは、若手を中心にして海外に向か  
って発信し活躍する人が増えていま  
す。

私が本学に着任しましたのは  
1993年でありますから、経済学部

する多様で豊かな蓄積と人材に活躍の  
場をあたえることが、「文学部の逆襲」  
の真意です。この「逆襲」をはたすこ  
とが、科長としての私のミッションだ  
と考えています。

の68年におよぶ歴史の3分の1にあた  
る24年間を私自身がこの学部とともに  
歩んできたこととなります。経済学研  
究科は2003年のカリキュラム改正  
以来、前期博士課程については「ジェ  
ネラル・エコノミスト」を、後期博士  
課程については「アドバンスト・エコ  
ノミスト」を育てるという目標を掲げ  
ています。一方、経済学部はその教育  
目標として2008年から「プラクテ  
ィカル・エコノミスト（PE）」の育  
成を掲げてきました。この学部の教育  
目標は、2016年から試行している  
グローバル志向の新しいカリキュラ  
ムに沿って、2017年より「グロー  
バル・プラクティカル・エコノミスト  
（GPE）」へと変更されます。

経済学部の新しいカリキュラムにお  
いては、英語による受信と発信を重視  
する科目が新たに提供されています

が、私たち教員が学生諸君に期待する  
GPEとしての能力は、英語を流暢に  
使いこなすことに限定されるものでは  
ありません。何よりも、経済学の知識  
を基礎にしながら国境をふくむもろも  
ろの境界線を横断して自由に、柔軟に、  
そして複眼的に思考し構想する力こそ  
が、GPEの核になる能力であると思  
えております。欧州と米国における近  
年の政治変動を見るにつけても、そう  
した能力を育むことは、日本の社会科  
学系学部・大学院にとって重要な今日  
的課題になっているのではないでしょ  
うか。

当学部・研究科の将来を、本学の自  
由な学風を今日的に発展させながら築  
いていく仕事に、微力ながら貢献して

## 実践科学を追究する

看護学研究科長 松田 光 信



大阪市立大学における看護教育は、  
昭和24年に設立された大阪市立医科大

まいりたいと存じますので、同窓生の  
皆様のお力添えを切にお願いする次第  
です。

### 〔履歴〕

1963年生。京都大学文学部卒。  
神戸大学大学院文化科学研究科修士・同  
大学博士（文学）。1993年大阪市  
立大学経済学部助教授。1998年フ  
ランクフルト大学にて在外研究。20  
05年大阪市立大学大学院経済学研究  
科教授。2006年パリ第13大学にて  
在外研究。専門は社会思想史、欧州統  
合研究。主な著書に、『欧州統合と近  
代国家の変容』（昭和堂）、「古典から  
読み解く社会思想史」（ミネルヴァ書  
房）、「ユーロ危機と欧州福祉レジーム  
の変容」（明石書店）など。

学厚生学院に始まり、その後、少子高  
齢化、医療の高度化、医療および看護  
ニーズの複雑化等、保健医療を取り巻  
く環境および変化する現代社会に対応  
するため、平成10年に大阪市立大学看  
護短期大学部へ、平成16年には大阪市  
立大学医学部看護学科へと移行されま  
した。さらに、平成20年に大学院看護

学研究科修士課程、平成22年には博士課程が開設され、看護学における学部から大学院までの一貫教育が可能となりました。

看護学は、多様な人間の健康的な生活を支える実践科学であり、科学・哲学・アートを知識基盤として、人間の複雑さの探究、経験的な看護実践への根拠の付与、あるいは新たな看護実践方法を創出する学問です。保健師・助産師・看護師は、このような学問を背景にもち、人々の生活の質向上に寄与する専門職であり、免許の取得をスタート地点として生涯にわたり学び続ける専門職です。

このような看護専門職者を育成するには、教員が認識をteachingからeducationへ、またeducationからlearningへとシフトさせ、学生の知的好奇心や研究意欲を喚起する教育方法の検討および導入に向けて取り組む必要があります。そこで、理想的な看護学教育の実現を目指して、看護学研究科におけるファカルティ・デベロップメント活動をさらに強化し、教員が相互に研鑽できる場を設ける等の仕組みをつくりたいと考えています。

本看護学研究科・医学部看護学科は、大阪市内唯一の公立看護学高等教育機関として、都市大阪の看護現場が

抱える課題を見極める力、人間に深い関心を寄せ人々の生活の質向上に取り組む力、科学的根拠に基づく看護実践方法を創出する力、そして看護の本質を探究する力と共に、グローバルな視野を備えた看護の実践者および教育研究者の育成を目指して参ります。非力な身ではございますが、精一杯、職務に尽力して参りますので、今後ともご高配を賜りますようお願い申し上げます。

#### 〔履歴〕

1967年生。佛教大学社会学部卒。大阪府立看護大学大学院修士課程修了・聖路加看護大学大学院博士課程修了・同大学博士(看護学)。1997年滋賀県立大学看護短期大学部助手、2000年岐阜県立看護大学講師、2004年福井大学医学部・大学院医学系研究科助教、2008年神戸常盤大学保健科学部教授、2014年本学大学院看護学研究科・医学部看護学科教授。主な著書に『看護師版「統合失調症患者」心理教育プログラムの基礎・実践理論』看護実践研究、質的・量的研究の成果』（金芳堂）など。

## 杉本町駅のスタンプ

市大の最寄りの駅は、御存知の通りJR阪和線の杉本町駅である。西改札口（二階）を出た横の窓口のところにスタンプが置かれている。

図柄は左にみるとおり、シンボルの本館（文化庁登録有形文化財）時計台を正面にキャッチフレーズは「歴史ある学び舎へつづく駅」となっている。赤いスタンプで、実物の大きさは、直径8cmとなっている。

JRを利用しての来学の節には、ちよつと記念にポンと押してみたいかが……。

